

《教育長メッセージ 第31号》

『春』

冬から春へ。

「はやぐ、あったけぐなんねがなあ。」

私の生まれた志津川は、海沿いの町で、東北にしては冬の寒さはそれほど厳しくはありませんが、それでも、みんな、春を待ちこがれます。

みなさんもそうでしょうが、私も色々なことで春を感じます。

空気の粒の大きさや鳥のさえずり、もちろん、花々や田んぼの色など。

ただ、私は、春は、あまり好きではありません。

中学を卒業して、私は、親元を離れて、高校に進学しました。田舎のしがらみから逃れて、まわりに干渉されないで、好きなように生活したいと、親元を離れたのですが、その時の心細さの記憶がよみがえるのです。特に、桜の花びらのはらはら舞う様子は、その記憶を助長します。

なので、新たな息吹とともに、春になると、親元を離れて、新しい土地で暮す若者たちが、今日もどこかで、不安の中でもがいているのだろかなと思いを馳せてしますのです。

みなさんも、なぜか、桜の花びらが舞う姿を見ると、心が締めつけられるような感じを受けないでしょうか。

そんな春が、今年も過ぎていきます。

さて、そんな私ですが、今年の春は、これまでと少し違いました。

秋に、還暦の誕生日に職員仲間から、チューリップの球根をプレゼントされました。

11月に、母とプランターに3種類の球根を30個ほど植えました。3月初めに芽が土を盛り上げてから、仕事から帰ると、母は、毎日のように、その成長を話してくれます。母は、春を心待ちにしていました。

今、だいぶ花びらが広がって、何とか持ちこたえて風に揺れていますが、チューリップが咲き誇っています。

来年も、母と球根を植え、春を待ちたいと思います。

私は、少し、春が好きになりました。



次回は、教育の世界でよく言われる「ひとりひとりを大切にすること」について、自分の考えを述べてみたいと思います。